

令和3年9月1日

独立行政法人日本学術振興会

第37回（令和3年）国際生物学賞の受賞者決定 ティモシー・ダグラス・ホワイト博士 (Dr. Timothy Douglas White) (米国)

独立行政法人日本学術振興会（理事長 里見 進）は、8月31日に国際生物学賞委員会（委員長 藤吉 好則：東京医科歯科大学特別栄誉教授）を開催し、第37回国際生物学賞の受賞者をカリフォルニア大学バークレー校統合生物学教授 ティモシー・ダグラス・ホワイト博士（71歳、米国）に決定しましたのでお知らせいたします。

1. 国際生物学賞について

国際生物学賞は、昭和60年（1985年）に昭和天皇の御在位60年と長年にわたる生物学の御研究を記念するとともに生物学の奨励を図るため、生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術の進歩に大きな貢献をした研究者に授与することを目的として設けられたものです。また、本賞の25回目を契機に、本賞の発展に寄与されている上皇陛下の長年にわたる魚類分類学（ハゼ類）の御研究を記念し、今後の生物学の更なる発展を図ることも本賞の趣旨に追加しました。

受賞者には、賞状・賞牌及び賞金1千万円が贈られます。また、秋篠宮皇嗣殿下からの贈呈品があります。

2. 受賞者について（受賞者の略歴及び授賞理由については別添資料を参照ください。）

ティモシー・ダグラス・ホワイト博士は、1950年生まれ。1995年からカリフォルニア大学バークレー校統合生物学教授、及び同校人類進化研究センター所長並びに同校生命・自然科学特別教授。

今回の授賞対象分野は「ヒト進化の生物学（Biology of Human Evolution）」です。ホワイト博士は、440万年前のアルディピテクス・ラミダス（ラミダス猿人）化石を始めとする様々な段階の人類化石やその周辺の動物相及び環境（古環境）資料の発見と分析を通じて、起源に近い時期の人類祖先像を明らかにするなど、それまでは不明であった人類の進化過程の様々な段階についての理解を飛躍的に進めました。ホワイト博士のこれまでの数々の業績は、ヒト進化の生物学における重要な発展を支えるものとして高く評価されるものです。

3. 授賞式について

授賞式は、例年11～12月頃に挙行しておりますが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を慎重に見極めつつ、後日に第37回授賞式の実施可否、及び実施の場合はその日程をお知らせいたします。また、東京大学にて開催の予定で準備を進めている記念シンポジウムについても同様に、今後の感染状況を考慮しつつ、実施可否を決定します。

第 37 回（令和 3 年）国際生物学賞の受賞者決定について

令和 3 年 9 月 1 日

独立行政法人日本学術振興会

独立行政法人日本学術振興会（理事長 里見 進）は、8 月 31 日に国際生物学賞委員会（委員長 藤吉 好則：東京医科歯科大学特別荣誉教授）を開催し、第 37 回国際生物学賞の受賞者をカリフォルニア大学バークレー校統合生物学教授 ティモシー・ダグラス・ホワイト博士（71 歳）に決定した。今回の授賞対象分野は「ヒト進化の生物学（Biology of Human Evolution）」である。

1. 選考の経過

国際生物学賞委員会のもとに、審査委員会（委員長 三村 徹郎：神戸大学名誉教授）が設置され、国内、国外の合計 1,607 の関係学術機関・団体及び有識者に対して推薦依頼状を送付した。これに応じ、推薦された 21 名（被推薦候補者の重複を除いた実数は 10 か国・地域、17 名）の候補者について、審査委員会は、4 回に及ぶ会議における慎重な審議の結果、ティモシー・ダグラス・ホワイト博士を受賞候補者として推薦することを決定した。

今回の決定は、この審査委員会の選考結果に基づいて行われたものである。

2. 受賞者について

氏 名 ティモシー・ダグラス・ホワイト博士
(Dr. Timothy Douglas White)

生年月日 1950 年 8 月 24 日（71 歳）

国 籍 米国

現 職 カリフォルニア大学バークレー校統合生物学教授

略 歴

1977 年 ミシガン大学自然人類学（Ph.D.）

1972 年-1975 年 ミシガン大学ティーチングフェロー

1976 年-1977 年 ミシガン大学講師

1977 年-1978 年 カリフォルニア大学バークレー校客員講師

1978 年-1982 年 カリフォルニア大学バークレー校助教

1982 年-1986 年 カリフォルニア大学バークレー校准教授

1986 年-1995 年 カリフォルニア大学バークレー校人類学教授

1995 年-現在 カリフォルニア大学バークレー校統合生物学教授

同 人類進化研究センター所長、兼古生物学研究者

同 生命・自然科学特別教授

栄 誉 歴

1995 年 アカデミー・オブ・アチーブメントゴールドプレート賞

2000 年 カリフォルニア大学リバーサイド校荣誉卒業生



- 2000年 アメリカ科学振興協会フェロー
- 2000年 米国科学アカデミー会員
- 2002年 アメリカ芸術科学アカデミー会員
- 2002年 南アフリカ王立協会名誉フェロー
- 2009年 サイエンス誌ブレークスルー・オブ・ザ・イヤー
- 2010年 タイム 100（世界で最も影響力のある 100 人）
- 2011年 ハワード・ヒューズ医学研究所ホリデーレクチャラー
- 2014年 エチオピア科学協会アソシエートフェロー
- 2019年 スペイン国立人類進化学研究所特別講師
- 2019年 バークレー地質年代学センター25周年記念キーノートスピーカー

3. 授賞理由

カリフォルニア大学バークレー校の統合生物学教授であるティモシー・ダグラス・ホワイト博士は、もともと成功した古人類学研究者として広く知られている。ホワイト博士は、様々な段階の人類化石およびその周辺の動物相及び環境（古環境）資料の発見と分析を通じて、人類の進化過程についての我々の理解に多大な影響を与えている。

ホワイト博士は、370万～300万年前のアウストラロピテクス・アファレンシス化石の詳細な分析研究において中心的な役割を果たし、同種が一つの種として認識可能であると示した功績が高く評価されている。ホワイト博士の提示したアファレンシス化石に関する解釈の枠組みは、今日に至るまで古人類学分野の研究に影響を与え続けている。

さらに、ホワイト博士は1990年以降、エチオピアにおけるミドル・アワッシュ調査プロジェクトを、エチオピア人研究者と共同主宰してきた。同プロジェクトではこれまでに、570万年前のアルディピテクス・カダバ、アウストラロピテクス・アナメンシス、ホモ属の祖先候補のアウストラロピテクス・ガルヒ、ホモ・エレクトス、16万年前のホモ・サピエンス・イダルトゥなど、極めて多彩な化石発見に成功している。これらの化石の分析研究によって得られた新たな証拠と解釈を示すことで、人類進化の複数の重要なステージに関して研究を大きく進展させてきた。

中でも特筆すべきは、440万年前のアルディピテクス・ラミダス、通称ラミダス猿人化石の発見である。この発見は、それまでまったく不明であったアウストラロピテクス段階以前の人類進化の様相を明らかにし、これによって人類進化研究全体が新たな段階へと移行したと述べても過言ではない。ホワイト博士が国際共同研究チームとともに明らかにした、歩行様式や、採食適応、性的二型（性別によって個体の形質が異なること）とそれが示す社会生態学的な意義、古環境と生息環境の選択といった、アルディピテクス・ラミダスという生物のさまざまな側面に関する知見は、人類の最も初期の祖先についてはもちろんのこと、我々人類にもっとも近縁な現生種であるチンパンジーやゴリラの祖先についても、これまでにない視座を与えるものであった。ホワイト博士らによって2009年に米国科学アカデミーの機関誌サイエンスに発表された、全身骨格標本を含むアルディピテクス・ラミダス化石の詳細かつ広範な分析結果をまとめた11篇の論文は、のちにサイエンス誌の「ブレークスルー・オブ・ザ・イヤー」に認定されている。

以上のように、今日までのホワイト博士による研究は、化石資料などの直接的証拠の提示とその精緻な解釈によって、人類の進化過程のさまざまな段階についての理解を飛躍的に進めてきた。特に起源に

近い時期の人類祖先像を明らかにした功績は高く評価されるものであり、第 37 回国際生物学賞の授賞対象分野「ヒト進化の生物学」に最もふさわしいと判断し、授賞を決定した。

4. 授賞式

授賞式は、例年 11～12 月頃に挙行しているが、本年の授賞式については、新型コロナウイルス感染症の感染状況を慎重に見極めつつ、後日に実施可否を決定する予定である。

5. 記念シンポジウム

ティモシー・ダグラス・ホワイト博士の受賞を記念して、東京大学大学院理学系研究科及び日本学術振興会との共催により、記念シンポジウムを東京大学において開催することで準備を進めているが、新型コロナウイルス感染症の感染状況を慎重に見極めつつ、後日に実施可否を決定する予定である。

6. 受賞者の研究業績及び代表的著作

研究業績

ホワイト博士は、自身のキャリアの早い段階から重要な人類化石の研究に取り組み、特に 370 万～300 万年前のアウストラロピテクス・アフアレンシス化石（足跡化石を含む）の詳細な分析研究における中心的役割を果たした。同種は当該化石群の変異が大きいことから複数種が混在するとの意見がある中で、ホワイト博士は、化石の徹底的な分析や比較、解釈を通じ、変異も含めて一種であることを示して、この種をアウストラロピテクス・アフアレンシスと命名した。ホワイト博士によるこのアフアレンシス化石に関する研究と解釈は、古人類学の分野のそれ以降の範となる内容であり、今日に至るまで同分野の研究に影響を与え続けている。

1990 年からホワイト博士がエチオピア人研究者と共同主宰してきた、エチオピアにおけるミドル・アワッシュ調査プロジェクトでは、アルディピテクス・カダバ（570 万年前）、アウストラロピテクス・アナメンシス（410 万年前）、アウストラロピテクス・ガルヒ（250 万年前）、アフリカのホモ・エレクトス（100 万年前）、ホモ・サピエンス・イダルトゥ（ヘルト人、16 万年前）など、様々な古さの人類化石が発見されている。ホワイト博士らは、アルディピテクス・カダバがアルディピテクス・ラミダスより原始的な祖先種であること、アウストラロピテクス・ガルヒはホモ属の祖先候補であること、ヘルト人は誕生間もない時期のサピエンスであることなど、精密な分析を通じてそれぞれの化石についての解釈を提示してきた。

特に、ホワイト博士らによる 440 万年前のアルディピテクス・ラミダス化石の発見は、400 万年前よりも古い、アウストラロピテクス段階以前の人類進化の様相について、初めてまとまった知見を与えることとなった。ホワイト博士は、ほぼ完全だが非常にもろくて壊れやすい全身骨格資料（通称アルディ）の長時間に及ぶ修復作業なども自身でも担当した。その結果として、アルディピテクス・ラミダスという種の歩行様式や、採食適応、性的二型（性別によって個体の形質が異なること）とそのことが示す社会生態学的な意義、同種の周辺の環境（古環境）を明らかにすることでこの種がどのような環境に生息していたかを推測するなど、アルディピテクス・ラミダスのさまざまな側面が、ホワイト博士らの研究によって明らかになった。こうした知見は、それまで漠然とチンパンジー的であったと想定されていた人類と現生類人猿の共通祖先像を、初めて具体的に検討する手がかりを提示し、また同時にアウストラロピテクスの人類進化史における位置づけについて新たな視点を提供することにもつながった。

今日の人類進化研究は必然的に長期的・国際的・学際的なものとなり、関連分野も地学・地質年代学・古生物学・考古学・タフオノミー（化石化の過程で生じるさまざまな変化に関する研究）・機能形態学・系統分類学など幅広い。ホワイト博士の、人類化石研究そのものはもちろんのこと、人類以外の動物化石や、タフオノミー、古環境、考古学、骨学、そして食人習慣などヒトの行動に関する事柄まで、広範な研究を自身で推進する姿勢は、まさにこうした今日の多面的な人類進化研究のあり方を体現しているといえる。

ホワイト博士は、後進の育成にも力を注いでいる。東アフリカ地域の出身者を含め、ホワイト博士らによって野外調査の現場や研究室で徹底的に教育された次世代研究者たちが、アフリカやアジアの古生物学の最前線で活躍しつつある。また博士の著した骨学の教科書は、比類なきスタンダードとして、初学者のみならず専門家にとっても必携の書となっている。

代表的な論文及び著書

- 1) White, T.D., Lovejoy, C.O., Asfaw, B., Carlson, J.P. and Suwa, G. (2015) Neither chimpanzee nor human, *Ardipithecus* reveals the surprising ancestry of both. *Proceedings of the National Academy of Science of the USA* 112(16): 4877-4884. Special Feature: The Future of the Fossil Record, PNAS Centenary, D. Jablonski and N. Shubin, eds. www.pnas.org/cgi/content/short/1403659111
- 2) White, T.D., Black, M.T. and Folkens, P.A. (2012) *Human Osteology*. Third Edition. Elsevier Academic Press. San Diego. 662p.
- 3) White, T. D., Asfaw, B., Beyene, Y., Haile-Selassie, Y., Lovejoy, C. O., Suwa, G., and WoldeGabriel. (2009) *Ardipithecus ramidus* and the paleobiology of early hominids. *Science*, 326(5949): 75-86.
- 4) White, T.D. (2009) Ladders, bushes, punctuations, and clades: Hominid paleobiology in the late Twentieth Century. In: D. Sepkoski and M. Ruse (Eds.) *The Paleobiological Revolution: Essays on the Growth of Modern Paleontology*. Chicago: University of Chicago Press. pp. 122-148.
- 5) Haile-Selassie, Y., Suwa, G., and White, T.D. (2009) Chapter 7, Hominidae. In: Y. Haile-Selassie and G. WoldeGabriel (Eds.), *Ardipithecus kadabba: Late Miocene Evidence from the Middle Awash, Ethiopia*. Berkeley: University of California Press. pp. 159-236.
- 6) White, T.D., WoldeGabriel, G., Asfaw, B., Ambrose, S., Beyene, Y., Bernor, R.L., Boissarie, J.R., Currie, B., Gilbert, H., Haile-Selassie, Y., Hart, W.K., Hlusko, L.J., Howell, F.C., Kono, R.T., Lehmann, T., Louchart, A., Lovejoy, C.O., Renne, P.R., Saegusa, H., Vrba, E.S., Wesselman, H., and Suwa, G. (2006) Asa Issie, Aramis, and the origin of *Australopithecus*. *Nature*, 440: 883-889.
- 7) White, T.D., Asfaw, B., DeGusta, D., Gilbert, H., Richards, G.D., Suwa, G., and Howell, F.C. (2003) Pleistocene *Homo sapiens* from Middle Awash, Ethiopia. *Nature*, 423: 742-747.
- 8) Asfaw, B., Gilbert, W.H., Beyene, Y., Hart, W.K., Renne, P.R., WoldeGabriel, G., Vrba, E.S., and White, T.D. (2002) Remains of *Homo erectus* from Bouri, Middle Awash, Ethiopia. *Nature*, 416: 317-320.
- 9) White, T.D. (2000) A view on the science: Physical Anthropology at the Millennium. *American Journal of Physical Anthropology*, 113: 287-292.
- 10) Defleur, A., White, T.D., Valensi, P., Slimak, L., and Crégut-Bonnouere, E. (1999) Neanderthal cannibalism at Moula-Guercy, Ardèche, France. *Science*, 286: 128-131.
- 11) Asfaw, B., White, T.D., Lovejoy, C.O., Latimer, B., Simpson, S. and Suwa, G. (1999) *Australopithecus garhi*: A new species of early hominid from Ethiopia. *Science*, 284: 629-635.
- 12) White, T.D., Suwa, G. and Asfaw, B. (1994) *Australopithecus ramidus*, a new species of early hominid from Aramis, Ethiopia. *Nature*, 371: 306-312.

- 13) WoldeGabriel, G., White, T.D., Suwa, G., Renne, P., de Heinzelin, J., Hart, W.K. and Heiken, G. (1994) Ecological and temporal placement of early Pliocene hominids at Aramis, Ethiopia. *Nature*, 371: 330-333.
- 14) White, T.D., Suwa, G., Hart, W.K., Walter, R.C., WoldeGabriel, G., de Heinzelin, J., Clark, J.D., Asfaw, B., and Vrba, E. (1993) New discoveries of *Australopithecus* at Maka, Ethiopia. *Nature*, 366: 261-265.
- 15) White, T.D. (1992) Prehistoric Cannibalism at Mancos 5MTUMR-2346. Princeton: Princeton University Press. 488p.
- 16) White, T.D. (1986) Cutmarks on the Bodo cranium: A case of prehistoric defleshing. *American Journal of Physical Anthropology*, 69: 503-509.
- 17) Johanson, D.C., Lovejoy, C.O., Kimbel, W.H., White, T.D., Ward, S.C., Bush, M.E., Latimer, B.M. and Coppens, Y. (1982) Morphology of the Pliocene partial skeleton (A.L. 288-1) from the Hadar Formation, Ethiopia. *American Journal of Physical Anthropology*, 57: 403-452.
- 18) White, T.D. (1980) Evolutionary implications of Pliocene hominid footprints. *Science*, 208: 175-176.
- 19) Johanson, D.C. and White, T.D. (1979) A systematic assessment of early African hominids. *Science*, 203: 321-330.
- 20) Harris, J.M. and White, T.D. (1979) Evolution of the Plio-Pleistocene African Suidae. Monograph: *Transactions of the American Philosophical Society*, 69, Part 2: 1-128.

<参考>

○ 国際生物学賞 (International Prize for Biology)

国際生物学賞は、昭和 60 年 (1985 年) に昭和天皇の御在位 60 年と長年にわたる生物学の御研究を記念するとともに生物学の奨励を図るため、生物学の研究において世界的に優れた業績を挙げ、世界の学術の進歩に大きな貢献をした研究者に授与することを目的として設けられたものである。また、本賞の 25 回目を契機に、本賞の発展に寄与されている上皇陛下の長年にわたる魚類分類学 (ハゼ類) の御研究を記念し、今後の生物学の更なる発展を図ることも本賞の趣旨に追加した。

受賞者には、国際生物学賞 (賞状、賞牌及び賞金 1,000 万円) を授与する。

○ 昭和天皇の生物学御研究と国際生物学賞賞牌

昭和天皇は、長年にわたり相模湾において生物学的調査をお続けになられたが、その間、腔腸動物・ヒドロ虫類に属するカゴメウミヒドラ科 2 種、即ちカゴメウミヒドラとキセルカゴメウミヒドラの標本を御採集になった。このうち、後者のキセルカゴメウミヒドラについては新属新種として御記載になった。昭和天皇は、これらの種の外部形態、内部形態、生活環、分類上の位置などについて、くわしく御研究になり、それによって本科についての知見が著しく増大した。

これらの種は、いずれも扇状の群体を形成し、枝は何度も分岐し、所々で枝の一部が融合連結している。本科、とくにキセルカゴメウミヒドラの群体の一部がメダル上に図案化されている。

地金は黒四分一 (銅・銀・金の合金) という日本独自の銅合金を用い、文様は、幅の広い部分は 22 金、狭い部分は純金の象嵌で表している。デザインは、吉田左源二 東京芸術大学名誉教授によるものである。



昭和天皇が相模湾で御採集になり、新属新種として命名記載された有鞘類のキセルカゴメウミヒドラ



国際生物学賞 賞牌

デザイン：吉田 左源二

(東京芸術大学名誉教授)

制作：飯野 一郎

(東京芸術大学名誉教授)

○これまでの受賞者

- 第1回 (昭和 60 (1985) 年、授賞分野は「系統・分類学を中心とする生物学」)
エドレッド・ジョン・ヘンリー・コーナー博士 (英国)
ケンブリッジ大学名誉教授
- 第2回 (昭和 61 (1986) 年、授賞分野は「系統・分類学を中心とする生物学」)
ピーター・ハミルトン・レーブン博士 (米国)
ミズーリ植物園長
- 第3回 (昭和 62 (1987) 年、授賞分野は「発生生物学」)
ジョン・バートランド・ガードン博士 (英国)
ケンブリッジ大学教授
- 第4回 (昭和 63 (1988) 年、授賞分野は「集団生物学」)
木村 資生博士 (日本)
国立遺伝学研究所名誉教授
- 第5回 (平成元 (1989) 年、授賞分野は「海洋生物学」)
エリック・ジェームズ・デントン博士 (英国)
英国海洋生物学協会研究所 (プリマス) 元所長
- 第6回 (平成 2 (1990) 年、授賞分野は「行動生物学」)
マサカズ・コニシ博士 (米国)
カリフォルニア工科大学教授
- 第7回 (平成 3 (1991) 年、授賞分野は「植物を中心とする機能生物学」)
マーシャル・デヴィッドソン・ハッチ博士 (オーストラリア)
オーストラリア連邦科学産業研究庁主任研究員
- 第8回 (平成 4 (1992) 年、授賞分野は「比較生理学」)
クヌト・シュミットニールセン博士 (米国)
デューク大学教授
- 第9回 (平成 5 (1993) 年、授賞分野は「生態学」)
エドワード・オズボーン・ウィルソン博士 (米国)
ハーバード大学教授

- 第10回（平成6（1994）年、授賞分野は「系統・分類を中心とする生物学」）
エルンスト・マイア博士（米国）
ハーバード大学名誉教授
- 第11回（平成7（1995）年、授賞分野は「細胞生物学」）
イアン・リード・ギボンス博士（英国）
ハワイ大学教授
- 第12回（平成8（1996）年、授賞分野は「生殖の生物学」）
柳町 隆造博士（日本）
ハワイ大学教授
- 第13回（平成9（1997）年、授賞分野は「植物科学」）
エリオット・マーチン・マイエロヴィツ博士（米国）
カリフォルニア工科大学教授
- 第14回（平成10（1998）年、授賞分野は「多様性の生物学」）
オットー・トーマス・ソルブリーグ博士（米国）
ハーバード大学教授
- 第15回（平成11（1999）年、授賞分野は「動物生理学」）
江橋 節郎博士（日本）
日本学士院第2部部長、東京大学名誉教授、岡崎国立共同研究機構生理学研究所名誉教授
- 第16回（平成12（2000）年、授賞分野は「発生生物学」）
シーモア・ベンザー博士（米国）
カリフォルニア工科大学教授
- 第17回（平成13（2001）年、授賞分野は「古生物学」）
ハリー・ブラックモア・ウィットェントン博士（英国）
ケンブリッジ大学名誉教授
- 第18回（平成14（2002）年、授賞分野は「進化生物学」）
根井 正利博士（米国）
ペンシルベニア州立大学教授
- 第19回（平成15（2003）年、授賞分野は「細胞生物学」）
井上 信也博士（米国）
ウッズホール海洋生物学研究所勲功科学者
- 第20回（平成16（2004）年、授賞分野は「系統・分類を中心とする生物学」）
トーマス・キャバリエースミス博士（英国・カナダ）
オックスフォード大学教授
- 第21回（平成17（2005）年、授賞分野は「かたちの生物学」）
ナムーハイ・チュア博士（シンガポール）
ロックフェラー大学教授
- 第22回（平成18（2006）年、授賞分野は「時間生物学」）
サージ・ダアン博士（オランダ王国）
グローニンゲン大学教授
- 第23回（平成19（2007）年、授賞分野は、「遺伝学」）
デビッド・スウェンソン・ホグネス博士（米国）
スタンフォード大学名誉教授
- 第24回（平成20（2008）年、授賞分野は、「生態学」）
ジョージ・デイビット・ティルマン博士（米国）
ミネソタ大学教授
- 第25回（平成21（2009）年、授賞分野は、「感覚の生物学」）
ウインスロー・ラッセル・ブリッグス博士（米国）
カーネギー研究所植物学部門名誉部門長
- 第26回（平成22（2010）年、授賞分野は「共生の生物学」）
ナンシー・アン・モラーン博士（米国）
イエール大学教授

- 第27回（平成23（2011）年、授賞分野は「発生生物学」）
エリック・ハリス・デヴィッドソン博士（米国）
カリフォルニア工科大学教授
- 第28回（平成24（2012）年、授賞分野は「神経生物学」）
ジョセフ・アルトマン博士（米国）
パデュー大学名誉教授
- 第29回（平成25（2013）年、授賞分野は「進化生物学」）
ジョセフ・フェルゼンシュタイン博士（米国）
ワシントン大学教授
- 第30回（平成26（2014）年、授賞分野は「系統・分類を中心とする生物学」）
ピーター・クレイン博士（英国）
イェール大学教授
- 第31回（平成27（2015）年、授賞分野は「細胞生物学」）
大隅 良典博士（日本）
東京工業大学フロンティア研究機構名誉教授
- 第32回（平成28（2016）年、授賞分野は「多様性の生物学」）
スティーブン・フィリップ・ハッベル博士（米国）
カリフォルニア大学ロサンゼルス校卓越教授
- 第33回（平成29（2017）年、授賞分野は「海洋生物学」）
リタ・ロッシ・コルウェル博士（米国）
メリーランド大学特別名誉教授、ジョンズホプキンス大学特別名誉教授
- 第34回（平成30年（2018）年、授賞分野は「古生物学」）
アンドリュー・ハーバート・ノール博士（米国）
ハーバード大学フィッシャー記念教授
- 第35回（令和元（2019）年、授賞分野は「昆虫の生物学」）
ナオミ・エレン・ピアス博士（米国）
ハーバード大学ヘッセル教授
- 第36回（令和2（2020）年、授賞分野は「環境応答の生物学」）
篠崎 一雄博士（日本）
理化学研究所環境資源科学研究センター特別顧問